

neo

Autumn
2023

#01

⚕ MEDICAL INFORMATION MAGAZINE ⚕



新たな時代を医療とともに。

02

Doctor's Hand

福井大学医学部附属病院 整形外科

松峯 昭彦

10

VERY HUMAN

福井県看護協会 会長

江守 直美

福井県看護連盟 会長

林 靖子

14

FUKUI MEDICAL ASSOCIATION Interview

福井県医師会 会長

池端 幸彦

19

Medical LANDSCAPE

福井赤十字病院 院長

小松 和人

24

Professor's Voice

福井大学医学部附属病院 脳神経外科

菊田 健一郎

突然、世の中を襲った新型コロナウイルス。

100 年に一度といわれる感染症の恐怖が 21 世紀にふたたび。

この未知なるウイルスに、世界の医療者たちは立ち向かう。

多くの時間を費やし、自らを犠牲にして。

ここ福井県においても、どれだけ多くの人々が助けられ、

元気をもったことだろう。

そんな医療者のひたむきな姿を伝えたいという思いから、

この情報誌を発刊しました。

名前は「neo」。古来の医療神話が多く残るギリシャの言葉で、

「新しい」、「復活」を意味します。

世の中が日常を取り戻し、また新しい事に進んでいけるよう願いを込めて。

今後も時代と共に変化していく医療の現場、

そこに関わる人にエールを贈る媒体となることをめざして。

neo 編集室

STAFF

Project Design 坂口 俊克
Writer 白鳥 幸代
Photographer 藤森 祐治
Designer 吉田 真人
西村 恭子

Cover Design 101%

発行／スギメディカル株式会社
〒920-0345
石川県金沢市藤江北 4 丁目 280 番地
TEL : 076-254-1785 (neo 編集室)
E-mail : t.sakaguchi@project-ishin.net

福井大学医学部附属病院 整形外科

松峯昭彦

フィジシャンサイエンティスト集団へ

整形外科疾患を広くカバー、
全人的治療を重視

福井大学の整形外科は、守備範囲の
広さが第一の特徴だろう。大学病院な
らではの医療、すなわち、骨・軟部腫
瘍、関節疾患、脊椎・脊髄疾患、リウ
マチ性疾患、四肢・脊椎外傷など医局
員は各自、専門領域に属し、高度な診
療を行う。その一方、救急外来の外傷
や骨折にも適宜対応する。大学病院が
北米型ERの救急体制を採っているか
らだ。北米型ERとは、1次救急から
3次救急まですべての救急患者を受け
入れる救急体制であり、大学病院とし
ては全国的にも稀な例といえる。

一般に、大学病院の整形外科では、
骨折や外傷は診療対象になっていませ
ん。しかし、当科では整形外科疾患を
幅広く扱います。外傷の治療数はおそ
らく、国公立病院のなかでは有数です。
働き方改革の問題もあり、忙しいのは
玉に瑕ですが、研修医や専攻医が経
験を積むには好ましい環境だと思いま

す」松峯昭彦教授はこう胸を張る。

第二の特徴は、他の診療科との密な連携を活用しながら治療に当たっていることである。最近では80歳を超える高齢者に対する手術の機会が増加している。さらに、糖尿病や循環器疾患、認知症など何らかの持病を抱えている例は少なくない。重度外傷の症例では、骨折だけでなく、臓器の損傷を伴っていることもある。以上のような患者に対し、安全で良質な診療が行えるよう、他の診療科の医師と協働して全人的な治療に努めている。

人間性の尊重と 熟練の技術による診療

第三の特徴は、疾患にかかる前のQOLの回復にこだわっていることだろう。たとえば、整形外科で扱う腫瘍は、筋、神経、脂肪、血管などの軟部組織由来と骨組織由来に大別され、また、腫瘍には良性と悪性がある。そのなかで悪性の原発性骨・軟部腫瘍を肉腫とよぶ。肉腫の手術では、周囲の正常組織を含めた広範切除が必要だが、可能な限り機能を温存する患肢温存手術が重要である。しかし、再発リスクや手術技術への不安に捕らわれるあまり、四肢

機能に配慮せず、ごっそり切除する術者もいる。

「私は研修医時代から、大阪大学やその関連病院、三重大学などで多くの症例を扱ってきたので、この肉腫はどのような手術を行うべきか、切除範囲はどうするか、経験的に判断できます。同じく、MRIやCTの画像を読むスキルも経験値に左右されます」

「患者さんから痛みが消え、疾患が治るだけでは不十分です。病気になる前と変わらなく仕事をし、趣味やスポーツを楽しむ。こうした人間の行動力を生かして『人間らしく生活を楽しめる』ことに可能な限り配慮する。当科では、そのような整形外科治療を目指しています」松峯教授は強調する。

第四の特徴は、医局員が各専門領域に属しながら、偏向や特化なく診療を行えることだ。たとえば、脊椎脊髄疾患領域では主に、脊柱管狭窄症、椎間板ヘルニア、腫瘍などの脊椎脊髄病を扱うが、人員の多い大学病院のなかには、頚椎・胸椎・腰仙椎という脊椎各部位の担当が決まっており、担当以外の部位には関与しないという例もある。

その点、福井大学の整形外科では、脊椎脊髄外科指導医が難治性を含む

あらゆる脊椎脊髄病に対応する。

「中嶋秀明准教授が中心となつて、どの部位でも治療技術の難しいものでも、高い水準で対処しています。特に、側方進入椎体間固定術や頸椎人工椎間板置換術など、福井県下ではいまのところ、当院でしか施行していない療法もあります」

粒子線治療とゲノム医療、 肉腫の新規治療の登場

松峯教授の専門分野は骨・軟部腫瘍（肉腫）である。その基本治療は手術だが、近年、治療の選択肢がぐっと増えた。その一つは、保険適用になった陽子線や重粒子線による放射線療法である。たとえば、仙骨（脊椎下部にある三角形の骨）に発症する原発性悪性腫瘍では、腫瘍周囲の神経も切除した場合、膀胱・直腸機能に障害を来し、尿漏れや便漏れを起こすようになる。この著しいQOLの低下が患者の大きなストレスとなるケースは少なくない。

「福井県では県立病院で陽子線治療を受けられます。福井が誇るがん治療の先進性を示しているとも言えます。陽子線治療なら神経を残せるため、排尿や排便機能が保たれます。と言っても、神経に対する放射線の





副作用は3、4年後に出るので、どうしても機能障害は免れません。仙骨腫瘍の場合、陽子線治療と外科的治療の5年後、10年後の予後結果はほぼ同じ。腫瘍ができた部位によって、手術が良い例もあります」

一方、肉腫に対する化学療法は長年、低迷している。肉腫は、日本人がかかる悪性腫瘍全体のうちの1%に満たない希少がんであり、患者数が非常に少ない。収益が見込めないことから薬剤開発が進まないのだ。厚労省や米国FDAは一計を案じ、希少がんに対する薬剤承認のハードルを下げたという。そもそも、患者

数が少ないため大規模な臨床試験はできず、薬剤開発は単アーム試験により行われていた。単アーム試験とは、一般的な臨床試験では被験者を複数の群に分けて比較するのに対し、単一群で行う試験をさす。

「肉腫治療薬の開発が進まない理由は、それだけではありません。肉腫には200種以上の組織型があるため、多くの臨床サンプルを用いた研究が困難なのです。それでも、遺伝子情報に基づくがんゲノム医療には期待しています。遺伝子パネル検査で遺伝子変異を解析し、その変異に奏効する薬剤も少しずつですが、

見つかっています」 新規治療薬を求めて 肉腫の正体を探る

松峯教授の主要な研究テーマは、新規治療法につながる肉腫の特性の解明だ。そのアプローチとして、肉腫オルガノイドの研究を進めている。肉腫に関しては、その発生・増殖・転移のメカニズムがいまだにわかっていない。

教授は以前、平面的に広がった培養細胞を使っていたが、二次元的な肉腫細胞は、ヒトの体内で塊として

在る肉腫とは異なることがわかってきた。そこで、ヒトの肉腫から幹細胞（≡自己と同じ細胞を作る自己複製能と、自己とは異なるタイプの細胞を作る多分化能とを併せ持つ細胞）を単離し、これを模倣した立体的な塊、肉腫オルガノイドと呼ばれるモデルを作成。このモデルを使い、腫瘍細胞がどのように成長するのかを検証する。肉腫の特性を解明することにより、病巣に作用する分子標的治療薬の開発を目指している。

また、肉腫の増殖に強く関与する遺伝子Xも発見している。遺伝子Xが高発現すると予後不良になるこ

と、ならびに肝臓がん、頭頸部がん、白血病などにおいても遺伝子Xの高発現は予後不良を来すことから、遺伝子Xを標的とする阻害薬は、肉腫以外の治療薬としても有望であることを示した。

「講座では、脊椎脊髄領域の研究が活発に行われており、脊髄再生医療、脊髄損傷、椎間板疾患などに関する課題に取り組んでいます。関節領域では主に、軟骨再生や変形性膝関節症の治療に関する研究や、日本人に合った人工股関節の開発を進めています」

「高水準な医療を患者さんに提供

することは私たちの使命ですが、研究をもっと活性化させたいと思っています。しかし、人員に余裕がない地方の大学では、研究に集中できる時間が思うように取れないというのが現状です。医局員を増やし、研究のための時間を確保できる体制を整えていきたい」

努力と成果の比例則を バネに、講座を強くする

今年4月、福井県整形外科医会の事務局が福井大学に設置された。県内の拠点病院や開業医が参加する整



「幸運は勇者を好む」を証明せよ

形外科医会では、かねてから症例検討会などの情報交換を行ってきた。大学に事務局を置くことで、様々な医療機関との連携を重視し、地域医療へ積極的に取り組もうという意欲を示したのである。

松峯教授に、医師を志した理由は、と水を向けたところ、「医師になったのは、大切な人が重い病気で亡くなったから」というような良い話は私にはないですよ」と笑う。ただ、医師になったとき、自分に合っている、天職だなと感じたと言う。「何よりも、患者さんにお世話になりました、と喜んでもらえる。医師冥利に尽きます」

教授にとつていまも心に残るのは、大阪大学の整形外科に入学したころの一心不乱の日々。

「大学卒業後、福井大学に残って整形外科医になろうと思ったのですが、全く思いがけないことがあり、大阪大学やその関連病院で研修することとなりました。当時、大きな

手術があると術後管理は研修医の役目。現在ならICU管理されるのが普通ですが、当時はICUのキャパシティーが小さかったため、整形外科病棟で管理することが多かった。容態の急変が気が気でないので、病院から離れられない。連日、病院に寝泊まりして研修医が患者の容体管理するわけです。過酷な環境に脱落してしまう研修医もいました。今の、労働衛生や医療安全上の考えからすると決してこのような生活は勧められるものではありません。しかし、そのような過酷な状況の中で得られた医師としての自覚・責任感は大きなものでありました」

最近では、医師の働き方改革を背景に、18時を過ぎると医局が空っぽという診療科もあると聞く。かたや、整形外科の医局員は努力家ぞろいであり、自己研鑽を怠らない。しかし、「今後の、医師育成にはこれまで大学の中では行われてこなかったような、効率的な教育システムが必要になります。仕事量と成果は比例するので

すが、仕事時間と成果は比例しません。短時間で、いかに仕事を効率的にこなすかが重要になってきます。短時間で仕事をこなす努力も必要ですし、効率を上げるためのシステムを皆で考える必要があります」

「"Fortune favors the brave" という言葉をご存じですか？ 幸運は勇者のもとに訪れる、一生懸命やっていれば良いことあるよ、という意味です。私はこの言葉が好きです。努力に無駄なものはなく、何らかが自分の身になると私は思っています。こういう格好いいことを医局のみんなにさりと話したいのですが、照れくさくてなかなか言えない」

来年7月、福井市で「第57回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会」が開催され、松峯昭彦教授が会長を務める。いかにして福井大学医学部整形外科の存在感を打ち出すか。その胸の内には魅力的な戦略を描いているに違いない。



Akihiko
MATSUMINE



profile
松峯 昭彦
まつみね あきひこ

福井大学医学部附属病院
整形外科 科長・教授

1986年 福井医科大学(現・福井大学)医学部 卒業
1986年 大阪大学医学部附属病院およびその関連病院勤務
1996年 大阪大学医学研究科博士課程 卒業
1996年 医学博士(大阪大学)取得
2001年 三重大学医学部整形外科 助手
2006年 三重大学医学部整形外科 講師
2010年 三重大学医学部整形外科 准教授
2016年 福井大学医学部整形外科学 教授

かつて「苛酷」と表現された看護師の処遇を、日本の看護協会と看護連盟は役割を分担しながら、その改善に尽力してきた。その実績は、看護関連の法律制定、勤務条件の是正、看護教育の向上など、

協会と連盟が協働

現在では「ほぼ当たり前」
になっている事項である。
そうした変革への努力と
意志をよく知る、福井県
看護協会江守直美会長と
福井県看護連盟林靖子会
長に、それぞれの役割や
今後の課題について聞く。

ベリー・ヒューマン



看護職の要望を叶える 両輪として

福井県看護協会は、看護職（保健師・助産師・看護師・准看護師）の有資格者が加入する看護職能団体であり、日本看護協会と連携する47都道府県看護協会の一つ。最たる役割は、一人の力では手に負えない問題を組織力で解決し、看護職に資することにある。主要な活動は、看護の質の向上、勤務環境の改善、人材育成と人員確保に取り組むことであり、これら3つの活動に関する要望を、県政や国政に提言する看護政策としてまとめる。

看護の質の向上に関しては、専門教育や研修を実施し、専門看護師・認定看護師・認定看護管理者の資格取得やキャリア継続を支援する。労働環境の改善に関しては、給与や手当の充実、労働時間の規定、有給休暇や産休や育休の拡充を図り、安心して働き続けられる職場づくりを促進する。人材育成や人員確保に関しては、教育機関の増設、ナースセンターでの就業相談などを行っている。また、在

宅医療や訪問看護などに関わる看護職の処遇改善も進めている。

一方、公益社団法人である看護協会は政治活動が制限されているため、看護政策を実現するための政治団体として看護連盟が誕生した。日本看護連盟は各都道府県に看護連盟を置いて、国政や県政等に代表議員を送ることを大きな任務としている。令和5年現在、参議院・衆議院に4名の看護系議員がいる。

政治の場に看護職の代弁者がいると、どんな成果がもたらされるのか。たとえば認定看護師制度。発足当時、資格を得るための研修期間は約半年間、費用は約100万円を要し、研修を受けられる施設も全国に2カ所しかなかった。これでは、スキルアップの意識がよほど高くないと、資格を得ようとはしないだろう。ところが現在、多くの病院は、研修費用を負担し、研修期間中の給与も保障して、看護師に、認定看護師資格を取得するよう奨励する。認定看護師の配置が診療報酬加算や施設基準の要件となったことで、病院の収益につながり、看護職の

教育・研修の支援をしてもらえるようになった。その結果、認定看護師や専門看護師の数も増えて、質の高い看護につながっている。

勤務環境、看護技術、 社会的評価も進化

「看護師はかつて、きつい、汚い、危険など、3Kや5Kの仕事と言われていました。患者さんの生命に関わるリスクを抱え、緊張とストレスにさらされる辛さもあります。現在は、働く環境も教育体制も格段に良くなったと思います。昔は、いくら国に働きかけても、看護協会の要望はなかなか通りませんでした。看護連盟が国政へ代表を送り出すことで、ようやく国の制度や法律は改定されるようになったのです」と、江守会長。

「確かに、私が病棟看護師だった時代に比べ、いまの看護職の勤務状況を見ると、隔世の感があります。IT技術や高度な検査機器の導入、新しい看護体制の開発など、看護の技術や体制も進歩しました。私としては、褥瘡エコーや

福井大学が開発したPNS®に注目しています」と江守会長。「出産や子育てに関しても育休を最低1年間はとれるようになりました。病院によっては3年まで延長できたり、時短や夜勤免除も可能です。院内保育や病児保育のある病院もあります。十分ではないにしても、少しずつよくなっています」と林会長も同調する。

褥瘡エコーは、皮膚表面の視診や触診ではわからない深部組織の損傷を検査できる。看護師にとって、褥瘡の適切なケアを可能にする有用な装置だ。

福井大学医学部附属病院看護部が開発したPNS®（パートナーシップ・ナーシング・システム）は、質の高い看護の提供を目的とする新しい看護体制である。経験値の異なる看護師が対等の立場でケアを組み、それぞれの得意を活かして協力し、看護ケアを始め様々な業務を一年間、行つというものだ。

また、コロナ禍は、医療人にとって医療崩壊という崖っぷちに立たされる厳しい試練だったが、得るものもあった、と江守、林両会長は見ている。ワクチンはなく、消

福井県看護連盟 会長

林 靖子

福井県看護協会 会長

江守 直美

PROFILE

1974年 京都第一赤十字看護学院 卒業
1974年 京都第一赤十字病院 就職
1976年 福井循環器病院・心臓センター 就職
1978年 福井赤十字病院 就職
2007年 認定看護管理者取得
2011年 福井赤十字病院看護部長 就任
2013年 福井赤十字病院副院長兼看護部長 就任
2016年 藍野大学 就職
2021年 福井看護連盟会長 就任

PROFILE

1980年 京都第一赤十字看護専門学校 卒業
1980年 京都第一赤十字病院 入社
1983年 福井医科大学医学部附属病院 入職
1991年 看護婦長昇任
2005年 福井大学大学院医学系研究科（成人看護学領域）修了
2015年 看護部長・副病院長
2019年 福井大学医学部附属病院 定年退職
2019年 公益社団法人福井県看護協会 会長

「協会の組織力と不断の挑戦が
看護職の不可能を可能へと
改革してきました」



3年目の頃の江守会長

毒液や防護具も不足した発生当初、感染リスクにさらされながら患者をケアする看護師たちの姿は、社会を勇気づけた。「看護師の専門性とプロ意識を感じ取り、一般の人たちの評価が変わったのではと、私たちは考えています」

福井県看護協会の 取り組みと課題

福井県看護協会では、看護業務に関する優れた取り組みに対し、幸せふくいへの挑戦事例」と

して、これを表彰する「アワード」という賞を設けている。対象となるのは、看護業務の改善、タスクシフト・多職種連携、AI・ICTの活用による業務改善、育児短時間勤務者の増加に伴う夜勤者不足の対策、待ち時間の短縮や予約変更など外来診療のシステム導入などである。「人手が足りないから」「当院は規模が小さいから」などの理由で改善への試みを諦めず、各々に見合った取り組みを行うよう、評価や奨励をするのも協会の務めだ。



また、「アワード」で得た情報をもとに、協会は、各病院の看護管理者たちの交流を図っている。

「大きな病院では比較的、良好な職場づくりが先行しています。たとえば、看護業務のスムーズな申し送り、勤務時間の延長防止、有給休暇や産休育休の充実などです。これら、各病院が優先的に解決したい問題に対し、大病院ではどのような仕組みを設けているのか、中小の病院にアドバイスをしています。病院の規模や体制は異なりますから、大病院の成功事例を中小の病院にそのまま適用するのは無理があります。ですから、その点は意見やアイデアを出し合うことで具体的な改善策をつくり、協会から県政に予算をお願いしています」と江守会長。

一方、林会長はこんな指摘をする。

「令和4年10月に、『看護職等の処遇改善手当』が診療報酬に盛り込まれ、令和5年4月には国家公務員医療職俸給表(三)が見直されました。看護師の職務評価を改正するものであり、大変喜ばしいことです。しかし、このような制

度改正による恩恵は、看護職のすべての人に与えられるわけではありません。個人病院や診療所、訪問看護ステーションなど、地域で働く人などは、国の施策による利益を得ていないのです」

本来の務めにこそ やりがいと誇り

江守会長が病院看護師のころ、数々の患者との出会いのうち、特に心に残るのは、「最期は自宅」と願う人たちだ。時には、病院でもう少し診療したいという担当医を、「家に帰れる時機を逃します」と説得したり、患者が家に帰るのは不安だと言う家族を説き伏せたり。「最期は家で迎えたいのに、連れて帰ってくれない」と嘆く患者のため、その家に向いいたこともある。姑との折り合いが芳しくないという人に「お義母さんをお願いします」と頭を下げた。「後日、そのお嫁さんが来られて、こう伝えてくれました。『亡くなる前、お世話になった、ありがとう、と義母から言われました』患者さんは、医師や家族に頼めないことで

も、看護師には話してくれる。やりがいと誇りを感じられる職務です」

林会長もまた、病棟看護師時代をこう振り返る。

「看護師の業務は『療養上の世話』と『診療の補助』ですが、最近是在院日数も短くなり、ベッドサイドで患者さんの手を握りながら話すという時間は少なくなってきたと思います。私が20代のころは在院日数も長かったのですが、患者さんはもちろんご家族とも仲良くなり、今でも年賀状のや

り取りをしている方もいます。何十年もたつて看護部長室に訪ねてきてくださった方もあります。患者さんのケアをしながらの会話は楽しかったですね。患者さんの回復はやりがいであり、残念ながら亡くなられた患者さん思い出になっています。現在は同意書等の書類が非常に多くなってきました、在院日数が短い分、重症度が高くなっています。いろいろ処遇の改善はされてきましたが、決して楽になったということはないと思います」



未来を拓くための 挑戦と研鑽を

林会長がさらに懸念しているのは医師の働き方改革の一環として医師の業務の一部が看護職にタスクシフト・タスクシェアされた後、看護職の業務をタスクシフトしていく先がないこと。看護職の業務は整理し、必要に応じて他職種や看護補助者にタスクシフトしていく必要があると思うが、現状では看護補助者も少なく課題の一つである。

また、地域包括ケアシステムが進めば、在宅療養や訪問看護を中心的に担うのは看護師。ショートステイやデイケアなどの介護施設でも看護機能が一層必要になり、人材確保はより大きな課題となるだろう。

「自宅で療養する人がどのような生き方をしたいのか、人生をどう全うしたいのか、その人らしい選択ができるようお手伝いをするのも、看護師の務めではないかと私は考えています。身体だけでなく、その人の生き方もケアできる能力を備えた人材を世に送り出し

ていきたいと思っています」と江守会長は強調する。

そして、江守、林の両会長は若手へこんなメッセージを贈る。

「私が臨床の現場にいたころは不可能だったことが、いまは可能になっています。多くの人が、諦めることなく、努力と挑戦を続けてきたからです。若い人には、失敗することも『出る杭は打たれる』ことも恐れず、新しいことにトライしてほしい。そういう取り組みが新しい看護の技術や体制作りにつながると思っています」

「私が若い人たちに期待するのは、熱意をもって看護師になったからには、キャリアアップに励んでほしいということ。スペシャリストでもいいし、ジェネラリストでもいい。大学に進学して、医療や看護とは異なる分野でもいいから学んでほしい。どんな知識でもスキルでも、努力して得たことはきつと役立ちます。そういう意識の高い人たちを支援したい」

看護師であることの喜びを知り、誇りを持つ人たちならではの言葉である。

「看護はとても楽しかったし、やりがいがあった。
若者にも看護の喜びを感じ、
スキルアップへの意欲にしてほしい」



22歳の頃の林会長

生命と暮らしと尊厳を守る、強い組織へ変革

福井県医師会会長 池端 幸彦

令和5年6月、福井県医師会会長に、3期目となる池端幸彦氏が就任。
越前市南部地区で地域医療拠点の池端病院を率いる「現役」医師だ。
福井県の医療を支える一翼の医師会を、どう運営していくのか。
長年、医師会役員を務めた経験、コロナ禍の試練から得た教訓を活かし、
体制強化と活動充実に池端会長は乗り出した。

コロナとの闘いから得たもの

池端幸彦氏が福井県医師会会長に初めて就任したのは、令和元年6月。波乱の幕開けだった。「県民そして会員のための県医師会へのチェンジ」を基本方針とし、活動指針を5本掲げて「さあ、これから！」というとき、同年12月、新型コロナウイルス感染症が世界を飲み込む。福井県でも令和2年3月に第1例が発生、医療崩壊が危ぶまれるほどの状況に陥ってしまう。会長は3年近く、コロナ対

策に明け暮れた。ただ、新興感染症の災いのなか、見えてくるものもあった。

「コロナから県民の命を守るため、医師会は組織としてどう動くべきかを考え抜き、行政や医療機関と手を携え、精一杯、事に当たりました。本年5月、新型コロナウイルス感染症が2類から5類に移行して日常が戻りつつあり、ほっとしています。医療関係者の皆様には本当に感謝しありがとうございます。私たち医師会としても、コロナ禍対策を通して、県民の方々に医師会について多少なりとも知っ

ていただけたかと思っています。また、コロナ対策を経験したことで、医師会の課題がより明確になりました」

会長は3期目に臨み、今期の基本方針を「県民のいのちと暮らしと尊厳をまもる県医師会」と定め、副題として「ダイバーシティ・マネジメントをめざして」を添えた。「医師は、いのちを守るだけでは不十分です。医師の使命は、人の生命を守り、生活を支え、尊厳ある人生を全うできるようにする。そんな思いを込めて『尊厳』という言葉を入れました」

県民に身近な存在を目指す

池端会長はこの基本方針の下、5つの活動指針を設けた。

一つめは「県民に開かれた県医師会」。医師会はクローズドであり、何をやっているのかわからない、県民は従来、そんな印象を抱いてきたと言う。コロナ禍のなか、県政と医療施設と医師会が3本の矢のように団結し、感染症対策や広報活動に奔走した結果、「県民に開かれた県医師会」について半分ほどは達成できた、と感じている。「県医師会会員は診療だけでなく、

地域医療の向上や県民の健康づくりのため、いろいろな活動を行っています。それを県民の方々に知ってもらい、もっと近い存在にならないといけない。講演会やセミナーを始め、医師会館で様々な催事を開いて人を呼びたい」

活動指針の二つめは「県内医療関連団体との連携強化」である。地域には、県医師会のほか、県看護協会、県歯科医師会、県薬剤師会、県臨床検査技師会、介護福祉関係などさまざまな医療関連団体がある。多職種連携が現在の医療の主流であるのと同様、各種の医



Profile

1980年 慶応義塾大学医学部医学部卒業、
同大学医学部外科学教室入局
1981年 浜松赤十字病院 外科
1982年 国立霞ヶ浦病院 外科
1983年 慶応義塾大学病院 一般消化器外科助手
1986年 池端病院 副院長
1989年 池端病院 院長
1997年 医療法人池慶会 理事長
2008年 社会法人難岳園（すうがくえん）理事長

療団体が連携を強め、いろいろな施策を一体的に打ち出すことが必要だと会長は考えている。

「いまだに、医師会は敷居が高い、と思われているように感じます。ですから、私たちのほうから、いっしょにやりましょうよ！と声を掛けていこうと思います」

活動指針の三つめは「組織の強化と活性化」。医師会の最たる問題は、全国的な組織率が50数%と、非常に低いことである。日本医師会会長も、喫緊の課題だと盛んに指摘する。組織率の低迷は、病院勤務医の入会が進まないことに原因がある。「医師会に入ってどんなメリットはあるのか」と発言する医師も多いと言う。

医師会の組織力が政治力になる

池端会長は、医師が医師会に入るメリットよりも、医師が医師会を有するメリットを訴える。

「医師の働き方やリスクマネジメントなどについて、医師が一人で陳情しても埒が明かない。医師会に伝えて大きな運動にして働きかけないと国は動かせません。こ

れこそ、医師が医師会を持つことのメリットです。政治への訴えを強大にするには、高い組織率が必要。医師会に入会してもらえよう、精一杯取り組みます」。特に、研修医や若い勤務医にアプローチしていくと言う。



活動指針の四つめは「新興感染症を始めとする災害対策の機能強化」。昨今、大型台風や線状降水帯などの被害は甚大であり、いまや日本は災害大国と化している。コロナ禍の経験を生かした感染症対策はもとより、災害対策機能の

ワードの一つに「ダイバーシティ」を掲げている。ダイバーシティとは多様性を意味し、既成概念からの解放も示唆する言葉。このダイバーシティの発想は、会長の陣営に反映されている。以前、医師会の女性役員は皆無だったが、会長



は2期目以降、女性理事を登用する。

「男性とは異なる視点の意見が聞けますし、場も和みます。理事会の雰囲気がすっかり変わりました。郡市医師会でも女性の登用が進むよう促したい」

拡充は大きな課題といえる。災害に対処する医療チームにはDMAT、JMATなどがあり、その充実も必要だ。また、医療施設のBCPもまだ十分には作成出来ていない。BCPとは、災害、感染症、テロ事件、大事故、供給網の途絶など不測の事態に面しても機能を停止しない、たとえ停止しても、短期間で復旧させる方針や体制の計画のことを言う。

活動指針の五つめは「広報活動・医政活動の充実」である。池端会長はコロナ禍初期、メディアに厳しい質問をされたり、発言を切り取られたり、と苦い経験をした。しかし、「できることは…、できないことは…」、「現況はこうです」など真摯な対応をするうち、メディアは理解を示すようになり、県民の好感も得られるようになったと言う。医政活動に関しても今後、医療団体が抱える問題を積極的に政治へ伝えていく。

池端病院を継ぎ、地域医療に取り組み

池端病院は、池端幸彦氏の父親が越前市王子保（おうしお）地区

また、医師会副会長3名のうちの1名が、福井大学医学部附属病院長という、異例中の異例人事。

「大学病院の現職病院長が医師会の役員というのは、おそらく、この医師会にもない例だと思っています。『どうしても副会長になっていただきたい』と、直談判に行きました。まずは学長の了解が必要で、と言われ、学長を説得しました」

「私の1期目のときも、当時の大学病院長に副会長になつていただきました。おかげで、新型コロナウイルス感染症が深刻だった時期、『先生、病床を空けてください』と駆け込むと、『しょうがないなあ』と言いつつ、コロナ病棟を速やかに設けていただけた。若い勤務医や研修医の方たちに医師会を知ってもらうためにも、大学病院との関係を大切にしたい」

目下、池端会長は、日本医師会理事、中央社会保険医療協議会（中医協）委員、日本慢性期医療協会副会長、社会保障審議会医療保険部会構成員など、いくつもの役職に就いている。福井県の医療のため、意見を述べられる場を増やしたいの思いからだろう。ほぼ毎

に開院した診療所に始まる。雪の降りしきる夜でも往診に出て行く父を見て育ち、「自分も医者になりたい」と思うようになる。

「弟も父の頑張っている姿を見ていましたが、なぜか医者にはならない、というようになりました。医院に入院設備ができると、外科医の父は手術を行うようになります。小学校に上がるころだったか、父が手術するところを初めて見て、感動したものです。実はその時、弟は血を見るのが恐くて、ぎゃーっと叫んで逃げ出してしまったのです。やはり私が後を継ごう、自然とそう考えるようになりましたね」

池端氏は慶應義塾大学医学部卒業後、外科に入局。急性期病院や拠点病院で外科医のスキルを磨くため、寝る間を惜しんで診療に動しんだ。その矢先のことだ。

「父が、政治の世界へ進むことにしたから、病院を継いでくれ、と言い出したのです。私は大学病院や関連病院でもっと研鑽したかったので、大変悩みました。私が継がなくては病院を閉めることになるだろうし、いずれは自分が病院を継ぐつもりでいましたか

週末、東京と地元を往復する。

一方、病院の診療にも、しっかりと当たっている。池端病院は、訪問診療、訪問看護、訪問リハビリテーション、通所ケアサービスなど地域医療の中核となるかかりつけ病院であり、多職種のスタッフが協働する。

「日常的に診療を行いながら、中医協を始めとする中央の審議会にも参画する医師会長は比較的小さいと思います。私はいろいろな役職があり、本当に忙しい。しかし、診療の現場を知っている者は、どこに出ても強い。医療の豊富な知識があること以上に強いです。患者さんの真の声を聞き取り、それを公的な場に伝えられる。社会に反映させられる。それが私の強みだと思います。私が医師会の会長であることの一番の意義は、そこにあります。ですから、私は現場に立ち続けます。幸い、病院のスタッフは、ちよつと指示を出す、とぱつと動いてくれる。よくやつてもらっています」

池端会長の穏やかな笑顔には、福井県民のいのち・くらし・尊厳に寄せる強く優しい思いが秘められている。

福井赤十字病院



福井赤十字病院は、脳卒中の治療やロボット手術に対し、
進取の気風で取り組み、独自性を示してきた。
令和5年4月、その8代目院長に小松和人氏が就任。
超高齢化や医療崩壊など地域が背負う問題を見据えながら、
病院の次代をどう導くのか、思いの丈を聞く。

卓抜した脳卒中治療や
先進的な医療で
地域に存在感を発揮

Design Your Smile
健康創造のスズケングループ



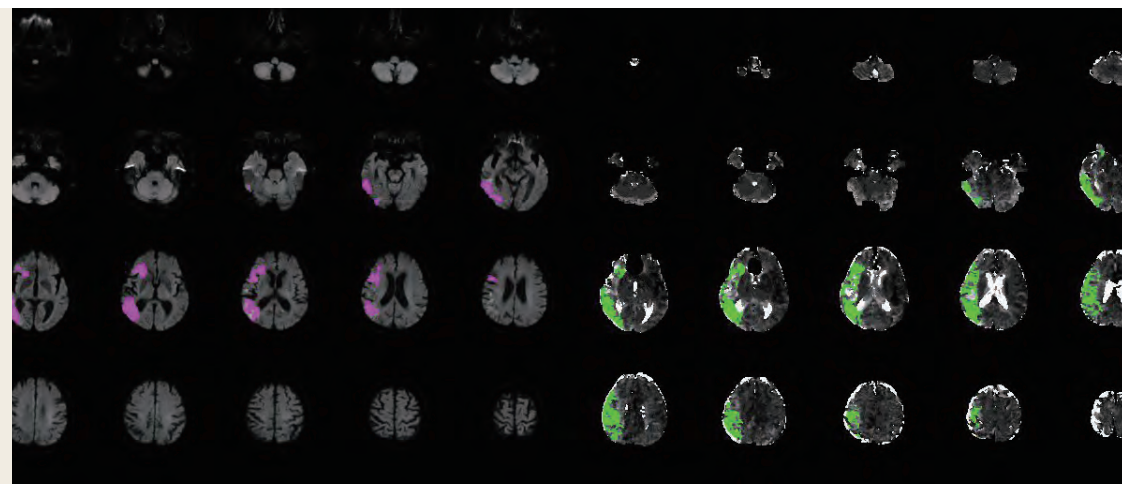
地球の健康とすべての人々の健康で
豊かな生活に貢献したい。
それが私たちスズケンの壮大なテーマです。



スズケンの事業領域は、健康創造。医薬品流通業界のリーディングカンパニーとして医薬品・医療機器の供給をはじめ健康に関するあらゆる分野でお役に立てるプライム・ベンダーをめざしています。

株式会社 スズケン

本社／名古屋市東区東片端町8番地 〒461-8701 TEL(052)961-2331
<https://www.suzuken.co.jp>



自動脳血流測定AI
「RAPID」の分析画面

手術支援ロボット
「ダ・ヴィンチ」の操作

高精度放射線治療装置
「Vero4DRT」



福井市街月見に立つ福井赤十字病院は、市民にとって「いのちを救うところ」を象徴するランドマーク。許可病床534床、標榜診療科25科、職員数1100人の陣容を数く。その歴史は大正14（1925）年、日本赤十字社福井支部病院として始まり、昭和18（1943）年に福井赤十字病院と改称。令和7（2025）年には創立百周年を迎える。現在、急性期・高度急性期病院である福井赤十字病院が重点的に取り組んでいることは様々なが3つ挙げたい。脳卒中診療、ロボット手術、がんに対する放射線治療である。

脳卒中（脳血管疾患）は、厚労省の2021年人口動態統計によれば、日本人の死因第4位、寝たきりになる原因の第1位。脳卒中には、血栓が血管に詰まって起こる脳梗塞、血管破裂による脳出血、くも膜下出血の3種があり、このうち脳梗塞が過半を占める。

急性期脳梗塞に対しては、薬剤による血栓溶解療法や、カテーテルを用いる血栓回収療法が行われるが、その対象は基本、前者は発症から4・5時間以内、後者は6時間以内。以上の脳卒中治療で重要なことは、いかに早く治療を始められるかに尽きる。早ければ早いほど後遺症を最小限に抑えられる可能性がある。

福井赤十字病院の脳神経センターでは、脳卒中専門医、脳卒中外科技術認定医を始めとする神経内科と脳神経外科の医師12名、脳卒中認定看護師を含む看護師、リハビリテーションスタッフ、ソーシャルワーカーを揃え、24時間365日体制で急性期脳梗塞に対応する。県内最大

三本の強みと歴史を有する拠点病院

超急性期脳卒中に24時間365日
対応できる病院は、極めて限られています



の脳卒中ケアユニット（多職種による専属チームが配属された、脳卒中患者専用の集中治療室）も備えている。

「人生」を救う脳卒中治療に傾注

「脳卒中は一刻を争う疾患。後遺症が残れば、当人はもとより家族の人生も変えてしまう。脳卒中に24時間対応できる病院は多くありません。24時間365日の治療体制を敷くには、然るべき人材と設備が必要ですから。当院は、脳卒中の後遺症で苦しむ方たちを少しでも減らしたいという思いで取り組んでいます」と、小松和入院長は強調する。

令和3年12月には、自動脳血流測定AI「RAPID」を導入した。脳のMRIやCTの画像から、すでに脳梗塞になっている部分と脳梗塞になるリスクがある部分を表示するシステムである。急性期脳梗塞への血栓回収療法は当初、患者の健康状態を確認できた時間から6時間以内の症例にだけ推奨されていたが、6時間以上経過していても、症例によっては血栓回収による再開通療法が有効なケースがあると判明する。RAPIDを用いれば、最終健康確認から6時間以上経過した症例、または発症時間不明の症例のなかから、血栓回収療法が有効な症例を見つけ出せる。福井赤十字病院が導入したRAPIDは、北陸の第1号だ。

「発症直後の迅速な治療が転帰改善の鍵」を唱える日本脳卒中学会は、血栓溶解療法が24時間365日可能な施設を「1次脳卒中センター」として認定、公表している。認定には、専門医の常駐や専属チームなどの要件を設け、

その格付け上位の「1次脳卒中センターコア」では、さらに厳しい要件を課している。福井で「1次脳卒中センターコア」に認められているのは目下、福井大学医学部附属病院と福井赤十字病院である。

時代先行の姿勢で最新機器を導入

「私が当院に赴任したのは2005年。当時、福井県で腹腔鏡手術の認定ドクターはごく僅かでした。泌尿器科医の私と当院におられた外科の藤井先生。ふたりで腹腔鏡手術をどんどんやりました。その時期、米国ではロボット手術が認可され、私は、日本でも手術はロボットに移行するだろうと考え、導入の準備を始めました」

ロボット手術は、保険適用が前立腺がんから始まったこともあり、現在、基幹病院の大半で泌尿器科のロボット手術は常道となっている。しかし、外科では、病院によってロボット手術導入に対する温度差があるという。福井赤十字病院の外科では、ロボット手術を積極的に導入してきた。2018年4月に胃がんに対するロボット手術が保険適用になったことを受け、同年7月、福井県初となるダ・ヴィンチを用いた胃がん手術を遂行。10月には、ロボット支援による直腸切除術を行う。こちらも福井県の1例目。現在、胃及び大腸切除術では、開腹手術や腹腔鏡手術よりもロボット手術の症例数が多い。

「ロボット手術は、安全性や低侵襲性の点で、従来の術式を超えていると言われていますが、まだ臨床データは揃っていないので、優劣を決めるのは早急でしょう。ただ、明らかに患者さんにメリットがあるなら、常にチャレンジ

「始めはやる気いっぱいでした。院生の研究の多くはうまくいかないし、日の目を見ない。院生であつても患者さんを診たいし、治したいものです。私も大学院4年にもなると学位を取って修了して、早く患者さんを治したい、その一心でした」

大学院生時代に赴任したのは、石川県七尾市の公立能登総合病院の泌尿器科。いまでも心に残る師と出会う。「川口先生は、手術がもの凄く上手。そして人格者でした。海外の論文を出してきて『本当はこういうことだ』とか、『教科書にはこう書いてあるけれど、実際はこうだ』といったことを教えてくれる。わずか1年でレベルの高い勉強ができました。先生が教えてくれた論文の著者に会いたくて、大学院修了後、留学しました。米国スタンフォード大学メディカルセンターの泌尿器科。夢がかないました」

「面映ゆい話は、もういいでしょ」と渋る院長に、締めくくると言をいたした。

「それなりのポジションに就くと、辞めたときのことを考えるものです。私は、後進を育てることに心を砕いていきます。自分が就いたときより、辞めたときには、自分の属する組織がもっと良い状態になっている。それが目標です」小松院長が先導する福井赤十字病院は、どんなアップデートを遂げるのだろうか。楽しみにしたい。

たのだろう。

大学院では、膀胱がんの診断法について研究したという。膀胱がんの微小病変や平坦病変を見分けられるよう、特殊な薬剤を使い、がんを光らせて可視化することに取り組んだ。

「始めはやる気いっぱいでした。院生の研究の多くはうまくいかないし、日の目を見ない。院生であつても患者さんを診たいし、治したいものです。私も大学院4年にもなると学位を取って修了して、早く患者さんを治したい、その一心でした」

大学院生時代に赴任したのは、石川県七尾市の公立能登総合病院の泌尿器科。いまでも心に残る師と出会う。

「川口先生は、手術がもの凄く上手。そして人格者でした。海外の論文を出してきて『本当はこういうことだ』とか、『教科書にはこう書いてあるけれど、実際はこうだ』といったことを教えてくれる。わずか1年でレベルの高い勉強ができました。先生が教えてくれた論文の著者に会いたくて、大学院修了後、留学しました。米国スタンフォード大学メディカルセンターの泌尿器科。夢がかないました」

「面映ゆい話は、もういいでしょ」と渋る院長に、締めくくると言をいたした。

「それなりのポジションに就くと、辞めたときのことを考えるものです。私は、後進を育てることに心を砕いていきます。自分が就いたときより、辞めたときには、自分の属する組織がもっと良い状態になっている。それが目標です」小松院長が先導する福井赤十字病院は、どんなアップデートを遂げるのだろうか。楽しみにしたい。

ジしたい」

福井赤十字病院の三つめの重点は、がんに対する放射線治療であり、2台の高精度放射線治療装置が稼働している。一台は、脳腫瘍や肺がんのピンポイント照射、前立腺がんの強度変調放射線療法を得意とする。呼吸に連動する肺がんや肝がんを追いかけながら放射線を当てる動体追尾照射の機能もある。もう一台は、広い範囲の病変にまとめて正確に短時間で放射線を当てることを得意とする。転移のあるがんでも、回転照射システムによりすべての病変に強力な放射線を照射する。2台とも、毎回の照射時に画像を用いて放射線治療の位置合わせをミリ単位で微修正することができ、がん周辺への放射線の影響を大幅に抑えながら、集中的にがんを叩くことが可能だ。

職員そして地域に寄せる思い

小松院長は今年4月の就任に際し、愛読書に喚起された2つのメッセージを職員に贈った。一つは「心理的安全性」の尊重である。自由に意見が言える雰囲気こそが組織の発展に寄与するという趣旨だ。「上司がおっかなくて若い人はものが言えないとか、もう、アウトです。高圧的な態度で組織をコントロールしようしても、決してうまく行きません。安全な雰囲気のもとで自由な現場の声を汲み上げたい」

二つめは「静かなるリーダーシップ」の薦めだ。病院の職員はすべて医療のプロであり、患者から見れば「リーダー」であるから、リーダーシップを取らなくてはいい

心理的安全性がないと、 組織は硬直してしまい、発展しません



ないと言う。

「リーダーなんて私には無理です、という人は多い。日本人は特にそうです。けれど、ジル・チャンの大ベストセラー『静かな人の戦略書』には、静かな人の能力を示唆しています。雄弁や迫力だけがリーダーの資質ではない。自分の性格や能力に応じたリーダーシップを取れば、物事はうまく行く、ということです」

いま、全国の公立・公的病院には、厚労省の三位一体改革が突き付けられている。急性期病院の統廃合や病床数削減などを掲げる地域医療構想、医師偏在問題、医師の働き方改革の3本だ。

小松院長は、国の施策に対し、先手を打っていると言う。福井赤十字病院の強みを打ち出し、医療資源の有効活用という観点から、医療圏にこだわらず、奥越や丹南の患者さんにも積極的に周囲の医療機関と連携を取りながら対応を行っている。ただ、働き方改革については、頭の痛い問題とつぶやく。福井赤十字病院は、時間外労働960時間が上限のA水準である。

後進を育てより良い職場環境を創る

「30年前、私たちの若いころは、日付が変わるまで働くのは当たり前。めざす者になるには頑張らないとだめ、と考えていましたから。でも、昔に比べて現在は、手術の技術も機器も、はるかに洗練されている。30年前の私たちより、いまの人たちのほうが、スキルは上を行く。長時間働けば力がつく、という単純な話ではないと思います」そう語る小松院長は、30年前、どんな医師だった



小松 和人

こまつ かずと

福井赤十字病院 院長

日本泌尿器科学会指導医・専門医
日本がん治療認定医機構がん治療認定医
福井大学臨床教授

Kazuto
KOMATSU

脳神経疾患を根治する、
精鋭チームを目指す

福井大学医学部附属病院 脳神経外科

「熟練の術者による手術は、根治性と即効性という患者さんに大きな利点がある」とする、福井大学医学部附属病院脳神経外科の菊田健一郎教授。顕微鏡を用いた微細構造の外科手術、マイクロサージェリーの名手である。高難度の手術を遂行する脳神経外科診療科の矜持、後進指導への熱意、そして、教授自身が手術の修練に打ち込んだころの思いを披歴する

KENICHIRO KIKUTA

先生の美しい手術に魅せられ 自分もその技法を会得したいと強く思いました

高度な手術を得意とする 脳神経外科

菊田健一郎教授室には、若手のころに執刀した症例の記録、「手術ファイル」が保管されている。「脳動脈瘤」、「脳腫瘍」…と題されたファイルには、手術の手順一つひとつに写真が添えられ、要点が書いてある。ページを追うごとに、上達への一途な思いが伝わってくる。そうした研鑽を経てきた名手は、「福井大学脳神経外科の本領は手術。特に難易度の高い手術にあります」と明言する。診療対象は、脳動脈瘤や脳内出血などの脳血管障害、脳腫瘍、頭部外傷であり、脳動静脈奇形（ＡＶＭ）、もやもや病、頭蓋底腫瘍といった一般の施設では難しい疾患にも対応する。

ＡＶＭは、脳内の動脈と静脈が、本来は毛細血管を介してつながるところ、異常な血管の塊を介している

先天的奇形。この血管の塊が破れると脳出血やくも膜下出血を起こす。もやもや病は、脳に栄養を送る太い動脈が閉塞して血流が不足し、これを補う「もやもや血管」とよばれる細い血管が発達する疾患。もやもや血管は脆く、脳出血の発症リスクが高い。頭蓋底腫瘍は、頭蓋骨の底部に発生する腫瘍の総称。腫瘍が脳の深部にあり、周囲に重要な神経組織や血管があるため、通常の術式では摘出が難しい。

以上のような高難度の手術をこなすだけでなく、脳、脊髄、末梢神経の様々な疾患を網羅している点も、福井大学脳神経外科の特徴である。

さらに、小児の脳・脊髄の先天的奇形は、これまで金沢の病院へ紹介していたが、現在では対応可能となった。かくして、脳神経外科疾患の治療は福井で完結という域に達している。

向上心を喚起する エキスパートとの出会い

福井大学脳神経外科が、高度かつ広範囲な診療体制を整えられたのは、第2代久保田紀彦教授と第3代菊田健一郎教授、それぞれの専門分野が教室の両輪となったことが大きい。久保田前教授は悪性脳腫瘍の病理、菊田教授は脳血管障害疾患を専門とする。

「脳血管障害疾患は、母校の京都大学脳神経外科が得意とする分野。1970年代、マイクロサージャリーは京大で始まり、全国へ広まりました。当時の私は、世界的に有名な橋本信夫先生の、息をのむほど美しい手術を目にして、自分もこんな手術をしたいと強く思うようになったのです」

2016年には、「神の手」で知られる脳神経外科医の福島孝徳氏と出会う。治療の難しい疾患を筆頭に、

様々な良性脳腫瘍の手術をゆうに2万例以上も執刀してきたドクターであり、鍵穴手術の考案者でもある。

鍵穴手術は、開頭部を直径2〜3cmとし、顕微鏡や内視鏡を挿入して執刀する低侵襲手術の一種だ。「当時、機会を得て、福島先生の良性脳腫瘍の手術を見せていただき、もっと勉強しなくては、と痛感しました。私は、自分の手術症例を見せに行き、それ以降、年に数回、福島先生と一緒に手術に入って手技を学ばせてもらっています」

若手の研究を奨励、 現場での教育を充実

教室の最近のトピックスとしては、院生の臨床免除と技術革新がある。

いま、地方の多くの大学病院では、マンパワー不足が優先的に解決すべき問題となっている。福井大学脳神経外科も、福井県全域と石川県加賀市の基幹病院へ医師を派遣していることから、人員に余裕はない。しかし、教授が院生だったころ、臨床に従事せず、研究に集中するという期間が3年半与えられた経験から、現状を何とかしたいと思っていた。よ

うやく2023年度、大学院生を毎年1名、2年間は臨床で働かず、研究に専念させられる環境を得た。

「これまで院生たちは、臨床研究論文で博士号を取っていました。しかし、本音を言えば、ベーシックサイエンスの指導者の下で基礎研究に取り組んだほうが、将来、優れた医師になると私は考えています。当教室では、人員数に少しゆとりが出たので、院生は2年間、研究に専従するという体制ができました。臨床も研究も、ぎりぎりまで押し切らないと成果は上がらないものです。院生のときにぜひ、研究に没頭してほしい」

技術革新については2021年、北陸ではいち早く「4K3D外視鏡」を導入、脳神経外科手術の現場が一新された。外視鏡は、大型モニターに映し出された術野を3D眼鏡で見ることにより、立体的で高精細な術野を、術者や助手をはじめ手術室の全員が共有できるシステム。マイクロサージャリーでは、術者が顕微鏡を介して見る立体的な術野と、助手がビデオカメラで撮る術野とは異なっている。つまり、外視鏡のメリットは、術者が若手医師や医学生に指導しやすく、教育効果が高いことに

ある。しかも、長時間を費やす脳神経外科手術において、外視鏡ならば術者は無理のない姿勢を取ることができ、負担が軽減される。「外視鏡を使うようになってから、手術について効率的に教えられるようになりました。実際、若手たちの上達も速くなったと思います」

研修医に、脳神経外科手術の 基本を徹底

福井大学脳神経外科では、入局したらず、マイ顕微鏡」を自前で用意する。マイクロサージャリーの基礎を身に付けるため、人工血管を使った血管切除・吻合の訓練を毎日行い、100本達成を果たさなくてはならない。

一方、教室からは、カテーテルの操作時に着用する放射線防護のプロテクター、「鉛の服」が新人へ贈られる。血管内治療の練習の際に使用するのである。

「血管バイパス手術と血管内カテーテルは脳神経外科治療の基本。両方ともできるように指導しています。血管吻合の訓練は、私も研修医のときにやりました。当時はラットを使っていましたね。初めのうちは

血管吻合を100本成功は、一筋縄ではいかない それでも達成できれば、必ず力がつきます

うまくいかないのが、なんとかしようとする。おのずと忍耐力が身に付きます。しかも、吻合したら血流を確認し、流れなければ失敗、やり直し。100本成功というのは、一筋縄ではいかない。同期8人のうち成功できたのは私ともう一人だけでした」

教授はまた、外部の達人を招聘したセミナーの開催にも積極的である。

今年11回目を迎えた頭蓋底外科解剖コースでは、教室と連携・関連施設の脳神経外科医が参加。解剖学教室の協力を得て、代表的な頭蓋底アプローチについて学んだ。今年12回目となった脳神経外科手術セミナーでは、若手向けの血管吻合のハンズオン、連携病院の医師たちが発表を行う手術症例検討会、他大学のベテランによる講演が行われた。

さらに、米国デューク大学に在籍する福島孝徳教授と菊田教授が指導

する福井側頭骨解剖コースが開かれ、医局員や研修医、関連病院の医師、福井赤十字病院の医師などが参加。実際の手術と同じ顕微鏡やドリル、側頭骨の模型を用いて、頭蓋底手術を想定した側頭骨のドリリングにトライした。福島教授から直接、指導を受けた若手たちはみな、高揚していたという。

脳外科医になるという強い意志

菊田教授は高校3年時、数学がずば抜けて得意で、京都大学の数学科を志していた。その矢先、弟が交通事故に遭い、脳挫傷で亡くなる。中学3年という若さだった。教授の進路は一変、京都大学医学部へ入学する。「医師になるためではなく、脳神経外科医になるため」だ。学部

文はコピーして読みふけた。やたらと脳神経外科に詳しいやつが学部にいると評判になるほどだった。

脳神経外科に入局すると、もやもや病を専門とする宮本亨先生（のちに京都大学脳神経外科第5代教授）との得難い出会いが待っていた。その瀟洒な血管吻合の手術はビギナーたちを魅了する。どうすれば、手術が上達するのかの一念に捕らわれていた菊田医師へ、「ラットの血管吻合を100本やり切ることが脳神経外科医への登竜門」という道標を、宮本先生が指し示す。

菊田医師の記念すべき血管バイパス手術一例目は、母校を初めて離れた赴任先の天津赤十字病院で実現する。「もう、めちゃくちゃうれしかった。これで自分は脳神経外科医としてやって行ける。大丈夫だ！」と歓喜した。

その後、京都大学の大学院で学位を取得、倉敷中央病院に意気揚々と



なぜ、ここでこれをやるのか、なぜ、ここを切るのか
わからなければ手術はできない、スキルも上がりません

赴任。「学位も取れたし、手術も結構できる、と私は思い込んでいました。ところが、山形専部長からできるのはバイパス手術か、遅れている。専門医になったらクリッピングを独りでやらないとだぞと言われ、すごいショックでした」

消化器外科ならば、胃切除ができて概ね一人前と認められるが、脳神経外科では、脳動脈瘤クリッピングが一人前手術である。血管をクリップで挟み、脳動脈瘤への血流をストップする術式で、動脈瘤の病態に応じてクリップの選択や挟み方に技術と経験が必要とされる。

菊田医師は、倉敷中央病院で動脈瘤クリッピングや腫瘍摘出術の経験を積み、脳神経外科手術の基礎を固めたのである。

教室員たちが腕を磨き、
エキスパート集団へ

本記事の冒頭でふれた「手術ファイル」は、倉敷中央病院や京都大学助手の時期に作成されたものである。「手術の全工程を分解し、なぜ、これをやるのか、なぜ、ここを切るのかといった各手技の要点を記録しました。脳神経外科手術数はあまり多くないため、手術と手術の間が空くと記憶が薄れてしまう。それを防ぐためのノートです」

現在の菊田教授は、術前にCT画像を見るだけで病態がわかり、手術の全シーンが脳裏にはっきりと描かれる。「私は素晴らしい師匠に恵まれました。私も、若手に手本となるような手術を見せなくては、と思います」さらに、医療人としての心構えをこう語る。

「大抵のミスは油断と怠慢から起こる。私の作った格言です。たとえば、深夜、患者さんにほんの僅かな異変があり、CTを取るべき

か迷ったとします。先日もこういうこと、ありましたと看護師に言われ、『ほな、様子見よか』そして、朝には悪化という事態になってしまった。自分の怠慢のせいです。たとえ真夜中でもCTを頼み、検査の間に飲み物を買っておく。異常なし、という結果が出たら、『手間かけたな』と技師に飲み物を渡す。しんどい時こそ、もうひと踏ん張り。それが良い医師だと思います」

福井大学脳神経外科では日々、菊田ジュニアが修練に励む。

教授の若手時代と同じように、先生のような手術がしたいと切望するビギナーたちが、いずれ脳神経外科の名手となり、教室をさらに強くする。確かな予感である。



profile

菊田 健一郎

きくた けんいちろう

福井大学医学部附属病院 脳神経外科 科長・教授

1991年 京都大学医学部 卒業
1991年 京都大学医学部附属病院 脳神経外科 研修医
1992年 大津赤十字病院 脳神経外科 医員
1998年 京都大学大学院 医学研究科 脳統御医学系 修了
1998年 倉敷中央病院 脳神経外科 副医長
1998年 医学博士 京都大学医博(第2060号)
2000年 京都大学医学部 脳神経外科 助手
2008年 京都大学医学部 脳神経外科 講師
2009年 福井大学医学部部門医学領域脳脊髄神経外科学分野 教授
2021年 福井大学医学部部門医学領域脳神経外科学分野 教授
福井大学病院副院長(経営担当)、福井大学学長補佐

全ては健康を願う人々のために

いつでも、どこでも、正確に、
そして安心、安全に医薬品をお届けする。
それが、全国の医薬品流通を支えるわたしたちの使命。
日々医療機関に足を運ぶなかで、
よりよい医療環境を創るサポートも行っています。
「医療」を支えることは、「人々の命」を支えること。
わたしたちは皆さまと共によりよい未来を創っていきます。

想いを伝える。

力を貸してください。

医療者は日々どんな想いで病と戦っているのだろうか。

医療現場は止まることなく動き続ける。

命と向き合い、患者を苦しみから救うために、情熱を注ぎこむ。

いまもむかしも変わらない光景。

その姿を多くの人に知ってもらいたい。

RECRUITING SPONSORS

協賛社
募集中

私たちは「医療情報誌 neo」の活動にご賛同いただけるスポンサーを募っています。

